藤めぐみさん

多様な大人、多様な子ども、多様な家族が生きやすい社会を目指して

「里親家庭を増やすにはどうすればいいか」という問いに対する答えのひとつがここにある。2016（平成28）年12月、大阪市の男性カップルが里親認定され、里親委託が始まった。厚生労働省によると、同性カップルとしては全国で初めての里親認定とされている。その背景について、LGBTと社会的養護の問題について多方面の専門家とともに考え、調査し、提言を続けている藤めぐみさんに話を聞いた。

●聞き手……太田美由紀（ライター）

◉一般社団法人 レインボーフォスターケア 代表理事

―虐待や親の病気など、さまざまな理由で親と一緒に暮らせない子どもたちを家庭で受け入れる里親制度ですが、LGBTの里親認定に関して、問題意識を持ったきっかけは？

藤　社会的養護が必要な子どもたちのうち、里親の元で育つ子どもの割合が日本は大変少なく、現在も8割以上は児童養護施設で暮らしています。これは先進国では異常な数字です。12（平成24）年ごろから社会的にもこの問題が注目されるようになりました。

当時、私は政治家の秘書をしていて、DVや虐待問題などへの問題意識から社会的養護に関心を持ち、知人が主催していた里親を増やすための勉強会に参加するようになりました。一方で、LGBTの知人から「子どもを育てたい」という話も聞いていましたし、私の周りには同性カップルで精子提供を受けて出産した人、離婚後に同性パートナーと子育てをしている人もいました。そこで、私が仲介役として里親関係者、LGBT当事者が集い勉強会を持つことになりました。

社会的マイノリティーである孤独感や偏見についてなど、お互いに共通のテーマも多く、里親の人材としてよいのではないかという感触が初回からありました。お互いにとって発見の多い勉強会となりました。

―団体はそのころ立ち上げたのですか。

藤　その後、すぐに立ち上げました。細々と勉強会を行いながら関心のある人をつなげることが目的でした。しかし、その年、アメリカのシアトルのソーシャルワーカーが関わっている里親家庭を訪問したことで私の気持ちが大きく動き出しました。

黒人の方と白人の方のレズビアンカップルの里親でした。本当に普通の家族でした。素敵な家で、愛に溢れていて、美味しい料理を作ってくれるお母さんが二人いて、幸せそうな子どもがいる。その光景を見たとき、日本でもこういう家族が増えてほしいと強く思ったのです。

困っていることもあるかと思い、いろいろ質問を考えていましたが、それさえも聞く必要がないくらいでした。一つだけ、「偏見はありましたか」と尋ねました。最初は批判的な人もいたそうですが、アメリカでは里親は日本と違い尊敬される存在です。地域活動にも参加していますし、里親であることで、地域の核となって信頼を得ているようでした。お互いに知り合い信頼し合うと、「レズビアンの○○さん」ではなく、「人間として、その人として」接することができる。そうすれば偏見はなくなると教えてくださいました。

―アメリカでは同性カップルの里親は、特別なことではないのでしょうか。

藤　「同性カップルの里親がいるのは当然のことで、特別に話すことはないよ」とソーシャルワーカーにも言われていて、それも衝撃的でしたね。日本では聞いたこともありませんでしたから。シアトルではNPOなどのソーシャルワーカーが里親をリクルートしていて、同性カップルは大変頼りにされています。普通の夫婦はまず自分たちの子どもを望む。その後、不妊治療をして里親を考え始めるころには40代になる。でも、ゲイカップルやレズビアンカップルは若いうちから里親になりたい人が多く、マイノリティーで生きてきたからその気持ちも分かることができるというのです。

―アメリカでのその体験から、日本でも実現したいと行動を起こしたのですね。

Profile

●ふじ・めぐみ●

1974年、豪州のシドニー生まれ、大阪府育ち。法務博士（専門職）。衆議院議員公設秘書、自治体職員、中間支援組織スタッフなどを経験。2013年、LGBTと社会的養護について考える団体「レインボーフォスターケア」設立。司法・立法・行政の各分野に携わった経験をもとに、LGBTと社会的養護に関する調査、提言を行う。児童養護施設職員向け研修ほか、自治体等での講演も。

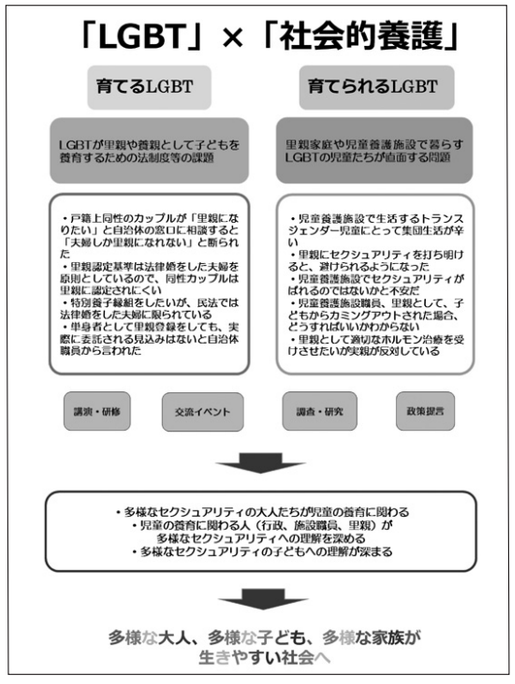
藤　はい。まず、同性カップルが里親になれるように法律を変えなければいけないと考えました。でも、調べてみると、法律には何も書かれておらず、禁止もされていないのです。にもかかわらず、同性カップルの里親がいないのは、窓口の判断で断ったり、消極的なことを告げたりしているのかもしれない。また、同性カップルの側も里親になれるわけがないと思い込んでいる人が多いのではないかと思いました。ということは、自治体の工夫次第で変えていける。

そこで、いくつかの自治体に働きかけましたが、厳しい反応でしたね。「同性婚が先でしょう」「ＬＧＢＴで里親になりたい人がどれだけいるの？」「同性カップルがちゃんと子育てできる？」「実績がない」「アメリカと日本は違う」と言われました。実は、一人一人の職員は個人的に大変理解がある人も多いのですが、自治体として前例のないことに手を出すのは躊躇するという空気がありました。公務員の方も個人としての感覚は大切にしてほしいと思います。

そんな中、ＬＧＢＴ支援事業に先駆けて取り組んでいた大阪の淀川区が、大変理解を示してくれました。ただ、里親制度は都道府県、政令指定都市に裁量があるので、淀川区長から大阪市の担当者に提言していただき、大阪市職員との意見交換が実現しました。その際、里親に関するさまざまな立場――里親、施設職員、当事者など――の意見を「さとおやオピニオン」にまとめ、大阪市職員、里親委託業務を行う職員の方々に手渡しました。

実は、そこでの手応えは期待していた程ではなかったのですが、その後、区のＬＧＢＴ支援事業ニュースレター『虹色ニュース！』（２０１５年９月号）で、大阪市こども相談センターから、「里親として適任者であれば、差別や偏見でもってＬＧＢＴ当事者を排除することは絶対にない」「私たち（こども相談センター）を信用してください！」「まずは、直接、相談に来てください！」というメッセージが発信されたのです。

急展開で大変驚きましたが、理想的な内容で、多くのハードルを超えられる広報だったと思います。その後、厚生労働省が認知する限りでは初めて男性カップルが大阪市で里親登録し、２０１７（平成29）年２月に里親委託が始まったのです。



一般社団法人レインボーフォスターケア公式ホームページより
https://rainbowfostercare.jimdo.com

――その後、大きな変化はありましたか？

藤　里親の登録人数が増えるだけでも単純に大きなメリットですが、それ以降も、某自治体では、「大阪市は大阪市。うちでは前例がない」と言って断られた方もいると聞いています。異性カップルか同性カップルか以前に、そもそも日本では「理想の家族」は働くお父さんと家にいるお母さんというイメージが強烈にある。里親のパンフレットにも、「僕にも欲しいパパとママ」と書いてある。シングルで子育てしている人や、共働きの家庭も多いのに、根拠のない形式的な家族像に縛られて里親認定が進まない。そのために多くの子どもたちが家庭環境とは程遠い児童養護施設で集団養育され続けている。本末転倒だと思います。

里親を増やしたいという流れは国にもあり、「子どもは家庭で育つ権利がある」と言っていますが、なぜ家庭が必要なのかという議論が進んでいない。関わる職員がコロコロと変わる集団養育ではなく、「愛情を持ってその子だけを見てくれる人が必要だ」ということを理解していれば、同性カップルでも何の問題もないことが分かります。本質を見てほしいものです。

「児童養護施設における性的マイノリティーに関するヒアリング調査」報告書。ホームページより無料でダウンロードできる

――これまで、東京都だけが里親認定から同性カップルを除外する基準を明示していましたが、18（平成30）年10月より認定基準を改正し、同性カップルも認めるようになりました。

藤　里親になれましたという報告も少しずつ受けていますし、議会などで首長が前向きな答弁をしていることも確認しています。今後、少しずつだとは思いますが、同性カップルの里親が生まれていくと思うので、その人たちの暮らしが多くの人に伝わることを願っています。そうすれば皆さんの意識も変わっていくはずです。

私も、里親研修を実際に受けましたが、子育てをするための教養や知識など、必要なことを学ぶ貴重な場でした。里親に限らず、孤立してつらい子育てをしているお母さんをはじめ、全ての人が受けられるようになればいいなと思います。

また、児童養護施設へのアンケートなどをきっかけに、児童養護施設で過ごしているＬＧＢＴ児童についてもたくさんの相談が寄せられました。職員の方たちも相談先がなく、どうしていいか分からないというのが現状のようです。２年がかりで調査をして『「児童養護施設における性的マイノリティに関するヒアリング調査」報告書』としてホームページで公表し、希望者には冊子もお送りしています。職員研修や講演会などにも出かけています。保健師さんにもぜひ現状を知ってほしい。

私がアメリカで同性カップルの里親家庭を訪問したとき、「この家族のように、幸せな家族が増えるだけの話なのに、何を躊躇することがあるんだろう」と感じたあのときの感覚が私の活動の大きな原動力になっています。これからも、さまざまな活動を通して、里親、ＬＧＢＴに対する理解を広げていきたいと考えています。ＬＧＢＴと社会的養護というと、非常に限られたマイノリティーの話と思われるかもしれません。しかし、この問題を解決することで、多様な人が子育てをし、多様な人が生きやすい世の中になると確信しています。